群書類從

二百六十三

和書門 類
九五九五 號
二〇四 函
六 架
六七〇 冊

内閣文庫
和書 類
九五九五 號
六七〇 冊
二一四 函
一七 架

内閣文庫		
番號	和	9595
冊數	670(334)	
函號	214	39

国立公文書館
National Archives of Japan

元老院図書記
日本政府図書

群書類従巻第二百六十三

和歌部百十八　家集三十六

撿挍保己一集

櫻井基佐集上

春

長楽寺なる比竜白毫寺にまゐりけるに人々
方丈にあつまりて野遊といふ事をよみ侍る
山よりも若菜野をわけて春霞きたりしものを宿のにほひ　なんめり
松風しらぬと試人乃とめゆける
ひとあかぬ中に水流れたる洞に樗かたへのなかの

霧ふかくとまり舟とふき侍りける

居そ月日秋はあなたの鳴さる也霧かくれ帆さへ見え侍り

初竹鶯

かすかなる宮も春さきも鶯の親の門まで來ぬるとは

きゝもしつ花乃色しめる久瀬乃家の梅侍りけるほどに

を物すとて見侍るに折て思ひ侍りて

言葉にあといひく袖とひ人色にほのあかき

梅の花香をさへあかぬ色見ていにしへ其の人まちかん

暁梅鶯といふ事を

山ふかくめくる日まで常に鶯の羽をまちて見る梅乃枝ふり

道利入道の新坊の梅咲けるに鶯の鳴けるを

きゝて

鶯の聲をはるかに梅の花枝末ほに咲初めたり

又一日あまりて入道ゝくよみて梅に付侍りける

鶯も匂ひあるかや我宿の梅にうつしもあきれてかしに

或所にて新梅を

梅か香の志のひしぬ都の妻をこひてのことすの追風

かすか袂の梅の雪を

匂ひくる梅かゝれかし清雷のとのゝえたの宮に加へ

坊門の宰相の家なる柳風あまれていと面白

ちりくれハ
枝ハしなやかにみだれ青柳の風にふかれてなびきせり

川柳

えだたれて水せきとむる河風にちる白波と花とみるなり

池柳

池水のみぎハなかるゝ青柳ハ浪にもまれて露やちるらん

朽木柳

岸のまへにくちし木の柳ハかげにかすかにくもむ急の若枝
やよひのそらしめつゝ岩しきさし侍るく
乃持枝といふ不代に位備ありけるにこゝろち

なやみしくてまてなら岩ゆるのぬをくあめ
ゆれいで一度ら化世にあるらちなこまく
なかしこ叔とかなくて又わこせくわくに
春風にさそハれやせん桜花ちらさらハおしむ人も
いとあハれに不同そて返しとかなくてわくに
まことしきそれもひし摘て桜花ちりそれハさきてハなとう
芳野の花ゆいめる新院二三人うちつれてまうて
て終日遊暮して
芳野山花の盛ハ人もあくてさるらう吾ハてうちつれ
常之入道

吉野山くもゐる桜袖ふれてかへるさは花乃雲にまかふ

南円堂に詣りて侍れは花乃盛にみえし

ありしに

補陀落乃浄土はいつくそ植し乃日本にも花や咲らん

折早蕨といふ事を

春の野乃芝生分てみつるひかる賤か杖の際もなきこゝろ

園乃あるしひとつふたつをよみ侍る

袖ふれて人はなくしの吉野へ若菜をつみて蕨折なり

或人の家にて侍るとよめる

春くれは霞をわけて見し雁のこゑ遠のく(?)

遠山雁

雲とほき遠山こえてゆく雁乃梢かくれ遠に跡きこえぬかの

暁帰雁

かへるとも暁かけて天乃をかりかりの声ふめとも侍りつつ

おなしこころをよみ侍りける

越路へとかへりし雁乃跡はまたちるもちりつる霞消りけり

花

よし野山花の盛に出る人一もとゆるせいつとなせむ

同

桜さく頃はたちとむ花の色袖ひきとめてちるをゝしまむ

花に寄て懐旧を

春ハ花遠しと山路指てしちかそのちからハいつまでそ

花なてさうぬるものを

花ニむとつる後徒来之毎にかへるこゝろと向ふての

若菜を摘とて来未と

花咲ハ散まで我ハ摘くたしのちハんにれ白雪の香

落花

桜花も風の白浪をつくすハ風をうらむ人ハあらずりき

菫

いてしかの春雨にぬれつゝ若菜の紀色とハわきてしてそはめ

或人乃離家とて鞭に河ときさるをこえよめのなり

河の名にもハ今来やもよきさきもあつらへれハかめの皆の日も暖とさえてはし

夏

文政乃ころを

春もむかし宴きちくち宮殿にて一またまさ我なれる

内大臣の屏風とて妻ハニ海の世あれ絵に山さと

乃駿の卯花にて卯花乃咲のみちかたを

残まで花乃さかりの旅人二三人たちよりて

まつもまさの残かまさんへうかれに

猶一ほとときすのなかさて卯花ハかみの命めをやぶれむとも

又月の夜乃卯花といふことを
白妙にさらさてみゆる卯花の光ハ月のよるに渡して
卯花誰家といふことを
咲にけし垣根のかこハ卯花にあたりハ雪と見えてみゆれ
菖蒲甚長といふことを
幾とせをそのかみにてみる菖蒲草長きねにめ新をひきつる
池の辺やあやめ草をきりて
露ふかき池のあやめを引人の袖はあやめハ玉にそはれる
初聞郭公といふことを
二声と待夜かさねて杜鵑山ふかき峰をあけかけ

端山聞時鳥
麓たにくるしき時鳥音羽の山にこゑ鳴なり
あやめ草軒にて鳴時鳥袖をそ兄らしむ
杜鵑といふ
ほとゝきす鳴つゝむ時鳥夜中の杜にさはりや
都へき川のあき人なりて醍醐へまかりける
おもひきや鳴声をきゝて
思めさやなきもとめつゝ郭公声をきけは
侍従といひてまかりける道にて

おとろきて我きゝてまたる一聲をいつちゆくらむ
よみ人しらす
君ならて鳴色なき時鳥きゝて一聲をかたらふなり
郭公の初音きゝて
桐河名の関初ねに名そ親いはぬ鳥にしてこそ鳴音
桐梅坊とよめる人おのかむ人をそれそしりける名
ともしきまつのこのはまをきゝてよみ侍りける
時鳥きなくこゑきく花初音は我とかはれぬなきけれ
窓乃戸ひらきけむを子とけふとす御つれて待
なるれのいつ時鳥の声きゝつるもとまつらん

よみ侍りける
旅にまかりける関にて時鳥のなけるをききて関こえしはゆきかた
或人の家にて
ある日いかにそなる初聲をきゝて親の声の後をや鳴てさらむ
或人の宿にて庵中にて時鳥といふをよめる
侍りける
時鳥まちわふる我の宿にも時鳥いつくこゑをしてなりけるは鳴
二条宗俊の家にて人々あまたよみける所に夜半の
親をとらめる
郭公暁つけて鳴聲をしきゝ耳にきく枕つくし哉

待時鳥

ほとゝきす暁かけて一声をきゝてもいまそなり
朝のおもしろき事といへるによりて三位中将よみあはれ
朝かほ小鳴てもとめぬに時鳥声ハさなからに鳴かはせなり
夜もなれしきゝなれぬ事ハ定数か云人よみなれたる
声はまたてもまた更ぬと思ふ時鳥あやしきけハ音清きなり
武にまて時鳥一声しといふ人をよまれ侍るに
よみける
時鳥なく路しもまちつゝ猿ハあきなく又聞に御しみ事
待わひしきゝなれしを人のあはといひ出れハよりあへ

すまゐ侍りける
子規鳴きやまぬを暁にまちぬ声に息のこゑをさ
池の氷草庵の中にて一夜をあかし侍り
なかにつれつれとよるをまつに近き比
ありける折ふし時鳥の鳴声きれハ
橘のかをりにまかふ時鳥鳴てもとめぬ乱るる数そ定まる
わかれきゝ待まさぬ人ハ恨しといふ事をよま
待てける
夜なれハせハとしきて時鳥数に思はぬ人ハ何かな
ある女のよみ侍りける

いく聲もきゝ盡さぬに時鳥なく一声をあかぬ思ひを
或葉つ乃上に侍る
郭公ひとこゑすゝむ人の野路も山路もかはらざる夜の日
播磨よりのぼる人小野にまうでくと聞て侍り
けるを志らずしき人三人ありけるにあひて過す
ひとりに出あひて時鳥よみ侍る人よあり
ありけるをよみ侍りける
時鳥声を出かけてあくがれいつきの山乃手向そきく
返ほとゝぎすをよみ侍る
庵近く名のりそめし時鳥あまりもきかせと思ふなり

雙葉とくさえわたるを花咲ほりあり
ける
廣き世の草の葉末におりゐて鳴郭公かなやと
卯花
雪の夜もさこれやこれや垣根なる卯花月のひかりまさりて
松井乃中里にかくて人々ともに卯の花を
夕風にゆるき杜の卯花ハ神をまつれ日ぞとを見
卯花風にちるをいとへ別当尚鬮殿
見ありける
葉かきにさく卯花を夕風のちらすなと

六条念西院にて、前よむべくあまさつらなり覚

蒙く

神まつる日は六王あれどあらひ寡かりけり白紙のぬき三

衣たるしあらひをよしと丸入道よみける

神業は手への夜あれなも蒙業にて代はりても逢ひかける

威寺にてむかし母乃も穂方をまちて侍りけるま

高忠橘薫風といふ人と侍しけり

匂ひをハ袖につつみしたち花の昔は香をハとどる恵へる

仁和寺の前より出て来しき人乃とぞつうけり会ひ

あるときせうそこを文にて給せるをも何とそしるし

くれたるにや、木の陰の森の露にまかせて一しほ

つれづれしくかなしみて侍りければ何事も

あるじに越さかたまへるとぞ文おこしける

やがて主はえまかりくるにありてよみて遣はしける

さりともかくしもいひ知らであるべきありけるに

あるし五月雨をよみ侍りける

六月雨ふりける屋の軒の玉水ハたえずしきて老を向ふ

船にのりける五月雨を

加之とも篝は小舟に留をかけて文結ぶき五月雨の比

小山せうとん院にて人をよみて前よまれける

乃が君は五月雨となんよみ侍りける

有馬山ゐなの笹原おく露に根もかくされし五月雨の比

舟よばひする渡りの杖と

舟もなき五月雨比乃角田川はむてもなくふかゝるさゝなみ

安楽寺は住侶ゑんゑんかいふ五月雨とよみ侍ん一首

たる前のおもかげを

五月雨に流るゝ舟やまゝるめ目にて白浪

久下八幡橋よまれる五月雨とてあめりける

きわひくる水やこえらむ宇治橋乃中さわ渡ハ五月雨の比

あるよ兵庫之浦のちか流るゝ人々さんくいゐ

し侍るハおほの浦は政所ハおらむ人なきハいはぬと

いひてくしてまうでぬさてかへそひ橋ちりぬ

かのあるところみ侍るなるにあるしは五月雨を

よみ侍る歌

難波潟入江はおもひとおもえてそことなき五月雨の比

夏草

夏の野に茂る草葉は露ふかく濡るゝすそ路をきて

あるし聖葉を

夏は野に大野乃原の草葉ぬれし細る駒もいさめる

かけ侍る人乃まで夏草かりしとて

らめりける
或ふるき華暦に年を追迎てくるゝはそことを尋ねける
瞿麦をよみ侍りける
朝夕袖のうへそへて折しきつるこれなでしこをいかに思へとも
枕かしんをさぬきの坊よみ侍ける
川しのたにされとめのまぬ気しこれ花乃匂香を我何のうれ
宗林居といへる人浜名の営をよみ侍ける
こゝろまぬる浜名の営の営火の居りまよ守護来るまゝ
夏ん営守る人のもとめて終日寄よみそん
為るまゝ小営と人によみ尽させる

夜もすゞしい旅ねる禄やに打寝つゝまゝ営火のけ
宮人来て二首よみる中に一首は営をよみける
まふ営風ゆきまかせて打ちよも帰るまで胸やもゆらむ
旅営
うき丈藤乃やまとの床の別れ小かれあまゝに居る営火
こゝろある人は日暮きころ夏あんしのえん
かひ旅もすゝまゝめて愚意をそひたた
俄小宮方丈ぐとゆきて冬宝乃しられれは日ときゆき
とふ人よみける
秋丈なる夏風すゝましく落やめは旅はなお寺さ冬宝めぐ

わかき稲の一穂をとりて　やかて新路送舟

いふ事をよめる

夕立は過ぬさり山のこなたなる松の木かけに涼む旅人

丹むしろの露もくらしくみなくあり清水まく

半白き雲ほし衣に河そひあり名に打つし

行よりむ人一夜人来ぬる穂はまさとちかくと

しきよるもん色まさる松か下なて松下泉

とふとくと

こるかに涼しき流るる松か枝の泉井の清水むすひ
あかる

樹陰納涼

夕風にふかく吹は楢の木の葉の落るからに涼しき

秋風しらるを民部の輔よみける人のうたの

いさ暑さもわすれやすらむ常盤木の影をすすき日かけの見

河邊納涼

志く浪のなかまに涼し河風にひきするとのあそひなきさ

訪人とくして鴨の海つてさん色まされる杜の

木ことに小蝉なるひまなしく鳴傳まの穂は

打ちきる蝉の鳴るはこゑしも社のからは鳥の殺

夏祓

七日これ辛儀の大麻は皆人ならへふらへ人ののかり

秋

秋立ころを

けふよりや秋たち初て物ことに風も身にしむ夕くれの色

秋風しころをよミ侍りける　中村形部丞

草も木も秋ちかきの世の事を顕はしや移ろひしきは虎まもて

荒屋の秋風よりも手を

葛かつら籬をめくらす庭ハ苔さへあらき秋乃夕風

萩をすゝきしるあしすきにきたるとある人の

此乃方あつまらくた之きよしといひ花葉の花

まてれハよみ侍る

萩ハ葉のそよくころもしとゝ秋風につけ露を置くらく候る

めもすゝき八道の女よみ侍る

風にもおしなく萩の葉さへいひきかも

西山にかくむ人れのよいをわらきころより世と

売りそめてかう西陽に光陰を知くまて侍るにある

人にいまみえそめて秋のあわれさにかたるその

まほ内いうあそれにやもくさしくさとしは山

やくらかのをしひをし八里につきたる西ハ色

つき仆つれあまたの方をしめ方その庄を二十間そう

つきゝたてみゆれハひとつのあやこもゆ紫つゝき

ゆふまくれしのする庭ハ出あの末の戸ひ
らきて三位も八宿しく乃穂の末を何つめたり
竹の笛子のにたまふしとの心て立りしこゝにやとめり
風てあのてあはし出ていさなひはてて秋の葉
なと何まさとも声て立せもん盛をめかくして
立てひと夜うち何しぬる庭の萩の上る
風の何うしきてたまふあへきといふを見かし
をしくこゝろまた立て秋ハよりもなすよとくをき
袖かつく尾花ハ秋の萩の葉ハすゝしく風やくらむ
萩乃葉風ハちるよのすゝをとゝ宿りける

秋風ハちりましく庭の萩の葉ハ尾花かおかに立あるてさゝめ

萱萩

我庵の新の夜覺に萩の葉もゆらと枕とて何らそさきく
野邊萩ととよめてまゐる
秋乃野ゝ庵のかたへの萩の葉ハ何ともなくとらくこゝをまかる
立やうつまん庵の弥弥野萩といへる事をよんて
佐つまるるれ
萩原やゆくへハ萩ハあかくしも宮城か原ハ見とくらしそん
秋かしし人けいの萩ともよめるてまゐる
野を遠ミ行ハなをさき萩原ハ今と何かそ帰へさ志ら

庭萩

露打ちし萩か下枝から下にむれし花の色をあはれそゐる
鴫の鳴の乃萩より下を我は継ぎよと侍りける
あふきく野辺鳴の浦は萩を八舟乃便ゆに乃へつるか
ゑ人見しの宮にても人によりて言のよしはかりし萩
稲水といふことをよみ侍りし
あは摂川まし於けある萩の花うつもちも花の色をす
玉日那寺にてくれ侍りしきこえちよ見え一首よし
なうに歌をよみ侍りける
萬ふかき秋乃野原は胡蝶は光あるかに[illegible]ある

ゆきとし唐に吉祥寺に於りあらえ和の
かたへに草庵をむすひて人によりて言ひと
しるひ侍りけり乃由名をさなくて折しかて
和歌をすんし学すきぬうきて八名に朝晩
乃つきしくをあくきむかたれとひくこほす
一世をつる唐にみ見をうしめ侍りある
と文人乃すきうちて人にまうせくるこをと
あき事をとるひりいひつけく塩折に
よ世て寄如玉といひへをあんへ侍りける
秋の霜の唐に葉露は玉とありとゆふきけにおとしぬ

又すゝきをよめりける
あはれなりすゝきをみても人心風にそよぎて世をや渡らむ
岩田乃家にて七月七日牽牛織女乃手向
むとて人々あつまりけるにまかりてよみ侍る
彦星は妻こし舟も絶え雲居はるかにわたる稀なる
人よめるあはれしんきを
秋風に渡る逢すゝしき銀河こゝろひある竜の浪まくらとは
我なるしこゝろ哉
天河ちぎりのもかはしさなりてぬらの世よりかいつの世までぞ
七夕へ手向よみ事を侍従の君よめりける

秋風は雲霧はらふ夜半のかゞ渡りなれ二星ぞよろこばしき
雲霧にまずる七夕とひろくとのかにかしとよみて
よみ侍る
明かたにたつ河霧におもはゆる川ともに雲にまよふなれば
七夕のなごりをしさを
きぬぎぬの名残もやしけれ織女の立かへるらむ天の川なみ
あかり人のしのひつゝのはなかそてのあたりもそのあかしらし
よめる
あかたへ風にみだれし女郎花たわみかへる便ありとも
おもひしこゝろ哉

秋乃野乃はもけ川にさゆる女郎花は其名のみ揺やかせむ

蘭

花ハひもとくまくさしハ蘭乃海共其に似たる香をむすびそ

義人乃女乃ちかき海を見て

蔵きる海きくさる人を偲ひて風ハなれかゝ霧さき香乃

小栗栖と云所よち東かん法師とて世をそむく人

乃もとへつかへる花をけ川にぬすしてよく常にハ

せうあう念佛しきり川らき世代をたちかくハ

らはせ名をつゝ徳をかくして霧人命をしれくり

きくへるなのあるとき松重乃ことくちかつ茄

猶乃有乃るハいさなひまうつ人突きしたひく

いひとゝせもくもとかくして海へくさるもち乃る

みあるを記せうそこ和歌して以お祝人かうに

筆へちん重ハいうくんそしとむなしくせんと

使り偈をハけるもたちと説き海ゐるそこそれ

まろをしまあやうに富貴の事しものゝそ

いそうなもすりうし打あうして探頭乃色ゝそ

庭にあらくされ乃小あう花にぬきさう花う

るうしく咲きゝうりを又それもとよせてかく

よう偈を

世の中乃もの文よみ顔乃たゞ一時の花と云ことなりや
とかひちん（素し）ハあはれきて近しと朽もひて
槿の花それより初めはた何ぞらちから横そうなき
文はむかしのむかしと
侘あらぬ秋乃千草がき露をかなしくなりし虫の声そ多き
朽ゆくしらうを
秋もの寂しく乃おる薮さき草の原にいり虫の夜寒が風や肌に近
松むしを
秋くるは風そゝぐ夕松虫の数く声すあへの松かく
武人乃屏風に蔦とりかゝるにそつみて出き

のそら侘しくしりよみける
秋乃よ虫のなくねハ真葛原にてきゝちらひきこえて
箕浦ちう海月あまかくの紙はかきよる雁
とよめといひちん（素し）なきハ
三越路のいく山越てくる雁乃秋の田面につきもやすめる
又初雁を鳴といふ事を
雁まつはけさそ鳴なる天の原声すといふを鳴出て
武人よそに行雁といふ事をよめといひたきハ
聞なる面影も見えてくる雁さ風にかきて横へきれなり
月

あかひしも限なき月をみる人かなこやまそふ見送るらん

八月十五夜

名にしおふ空も中の月を心あるかそらにのみ雲の晴へ

なかそらに伊勢物乃中にて人よりけり三五夜

中秋月とよとて寄よせ乃ゝ侍りける

花ぞちる月と松山にかけてある歌は空に見えし月のかな

あけもちれ毎夜まち侍りける

月とそも尾乃歌は何の心ひ積もなかりけるかな

ちんせうかんの詩侍よみけるに

定月めてあかひの月とめてまたなそ秋乃色の身

雲間月 といふことをよみ侍りける

さやかなる月のかけさへ雲ゐにかくれてきえぬるとこそ

山月

ちよかなる姨捨山の月影をみしとはいはし里に来てさる

越人乃ゆめにて寄よむ人にかはりてよみ侍る

あまひかりのかたに障子なしに夜もかく月のかけ

さしいてはある月をみ人にたとへていてきゝ人

えんにいていかにとひてまいるの程はとはまし

ゝ侍りける

毎その夜山乃端にてさやけき月の影さす庭の

まちわひてねさめて志のふわかあるそよふ
まさる旅月とふ千代
たひ根にやさよふ有明乃月まてそいふ秋のあしきよの中山
衣擣夜をさむつくもつらしまきとしつ人よ夜ゐ
まつのし
小夜更てくまなき夜乃鐘きこえけれは物思ふ人そ衣のおと
松風しらふ秋
よもすからも世にきかさる衣の音みちまつかすをつく
身の海き入道のかきつらくへてふかきよるの遠安
鹿とふ千とをなんよそ侍る

まつち山夜さむの風もいまそすくすくに衣の音をそこひたる
宿人よ衣まよる夜乃衣
古里人のいかて汲ぬらん秋乃夜の山下の里へさやとしの衣
松風しく人山衣
大江山秋乃ちくさに心よむなかまよこ衣のおともなし
武しの秋乃末つゆさせる下衣しの衣そ
かへるとも風たなひてひ秋すなるよそくそしる
木かけの紅葉とふ千代まそへ侍る
君をや菊垣志めし庭の間の花へまる庭のまこちて
ひとりあかしての旅まそ秋乃露おしまん

ちらんあまたして河をよみて詠よみ侍る

小斫端乃紅葉を

但ある色し斫る乃紅葉をしばしやあるは其の葉末にてなすもの

又笠屋にたちどりて宇津をよみ侍りける

なにめでたる君が千世まかる秋霜に笠屋の紅葉は秋にあひける

ある人の屏風にきくをかきたる絵に詠みける

といひたるは覗きとよみせしく

初霜におりてうつろひせん菊の花もろともに秋そあるらん

又ある屏風に稲田乃画をかきたるによみ

秋乃田に稲かり初て引むすひ田守るの袖にまつ川ぞ

あるとき紀僧学院をまもりけるに秋の稲かりもて

出て稲をこき文庫なる菴の庭をつくりくるそ

よみ侍りける

稲の女の苅干し稲を隣なくもきそいそうして玉襷して

或人の落葉浮水といふ題をよみ侍りしにいひさん

今も川となりては此のつゝ川乃道遠と思ひ

知らくしらずまあへは

大井河錦をおりたる浪は三秋乃紅葉やおりをきてかたむ

秋のたもとにとよみ侍りける九月尽

ゆくすゑもさかゆくまでハ秋霜ハ名におふこのもとの葉 など

櫻井基佐集下

冬

桂乃宮に出る人ありて御ふみの言葉ハいまの
何くれも小郷んと見まかる人の爲をもむきて花
ちしれるおもしろき縁かハしき人ありせばかし
とおもひくらせし折ふしこそやとて二三日ちら
かくしひてもろ門のの待るなに折り
ところとよみて時雨と
ともつる杖の枝乃志ら雅ハ笑めと御返し
ありしきて

早くより時雨に染ましらあすにこそねやかし　なれ八
まちかきに庵にひとりすめるらるゝ東のさく
よそなる行路時雨
思ひ出すも往来の人乃時雨して立よる橋乃下陰かな
我人まてこそまて
晴間なく降るに今朝の時雨には木葉も雨も降まよひけれ
宮人乃中にいとまき夜風にちん思ひけるかな人
くもすみゆきてよめるなる時雨を
かへくもの雲のところ手にひとつ時雨あらは自らものさ　聞雨ものと
秋照し時雨と

時雨けりちりの紅葉は山の錦しやまた文のうすん
厚みんとみ花人乃屏風にもみち手たるを
見てよめりける
時雨をれ比良の山乃秋の紅葉をも嵐にもえてける
文志く秋を
浮雲の如く我音し乃名を名にさすと思へも文志くまたり
哉苑の宿乃窓の志くもをいかとそ待つる
秋庵に窓うつ時雨きくも音ほそきて八幾年もすき
神無月乃あかつきにかむつかしくて世をふあり
久方の空しれはもなし人乃手つゝみてくもは

つきしまる杉むらによりて思ひてよる川
とのたのとかくりあひて時とうつしける京に
宮うらくをまて志くしく侍りしたれくし
侍るハまらう人ありよみ侍へといひけれハ
てあれ人に志あまへりしとよめ侍りける

山ふかき蔵王のかくれにもしろ時雨ふることつきてかりもとむる
何国も旅志けと云人ある所にて志るされたる

よみ人しらす

めくりくる白雲乃よそに志くるるハ跡ハ旧りにけり上架人

浦時雨をよみ侍りける

陸奥のちかの浦半乃志くるるハ稲志かたり海士の袖かも

又堅田の時雨を

風ふきし伴喫た舟乃志くるるハ堅田の里に人もかよはす

せりてかんよそうすさてあさこの人々よりて書
すかしつゝ旅寄奥州しもん庵すまゐるゝのち
うきよめといひくるハ松露とりて事をらみ
侍りける

あきたに松乃葉に木そくしくれハ色のかしらにもとかすめ

又雲間の宿といふことをよみ侍りける

くもりをする色にしくれも似くるは松の葉かなれあきかねをかりて

忠岑かほうしときき鳴る人が條の露といふ事
とよみ侍る
たつた山紅葉の葉にをく朝露をもみぢてよふ山の川の枝
蒼天霜といふはといふをよみもんへりける
善ちる露か打ち冬の夜は野への草葉にをくおそれなる
あかほとつゝふ沢にやむ下に叫き人のすさし出より
ひきこゝもをそいつち日出来山谷の声しき
梅下川乃ふせひ葉末乃とうりまかそまるありきめ
とあるしておもしろしるに歌とも文まつりてつり
をもんへりまて世乃ためのきまをうちひにいひ

波しけてのちかくよみてもしらふをとく宗居

霜

朝ぶすまを庭よ新羅の色まふにとまて年をハ送りきたるは
河白ハ谷川乃橋をわたる人にまみあらくときこゆるをきて
もろきまつら文字を渡る浮橋ふ橋もとくあつかまき朝霜
冬の日のいとさむけくてつもしく冴る相ふし
よるこらん風きこゆる寒夢
うら風にみてこえし汀ある芦の枯葉にもねさのまてあく
寒き寝
冬のきすそか北川かふ妹背ぬる 春葉も冬ハ絲よりこゝの

雪

降雪に木曽路乃旅はたえてそこともみえぬ梯を（あやふき）
藏人のかさミ川すゑといふ人のよむ所ゝきて
山雪とみえりとよめるなる

冬つもりあまちかき山を越るとき八桁の雪まつまて深ふなる
河るく乃水のそこ旅雪といふたるを人ふきとめ
らきてよめるなる

船河まてあふ家川小路雪なき所も河ふに袖そぬるゝ哉

暁雪

鶏る人と暁りけてきときは往来もたえむ大雪そふる

ちやうそん入道峯雪といふことをよめる

雪降て山乃高木もミえさ八花の雪とそ人ハいふらん

野路雪

かる雪にあさ野乃路の雪にやうらそ雪を払らちうきの雪のあへ
ともすみ人乃雪ふるにせうそとおとしるゝ雪の
雪ハいうみやそこらミゆるあさきかゝるをそやく
ミちか無人ふみあとくなしかきこもん家まし海ふ
くらこえそれハ例乃おのむ人ありてすむまな
山ひかえいふをそくうちもみあと無きあれ
庭前乃松ふ雪れいみしく降るを題よく

よめる松の宮
秋をせみる松虫しく声ハ雪をや掃ふかつく上枝
ある僧のさそりてよめる一首
夜さむしく風をさしくも吹落て音済さよの友らつまる
寺法師は俗のうちかひて比叡をすゝくしぬを作
てありゝなかすゑて詠れハ志か一首てよめる歌
第一首を
百首は第式め十葉もうつときてかしハこ有るちの藤垣
松風しくまさ
うつきさへハ名たへ様乃君かしてよろしきぬ　那智瀧の大雪

大嘗やのはうせん乃歌よゝく一根こくかあ
人くしよりて歌よみ侍りたるに名は此のまゝ
あ川まのこしよるきの事まて人をそ侍りたるう
あしおもひともこゝろつくし人とありしいま
それハ志あらくよのよせに名ま
雪よのきなかむるさい故人あつ海をことハやしにを逢く
崇徳井ちゝののりの息阿かきをあつくしく
あつせらくある禅知識ゟ雲水請を而里
してゝきのよに和にせよとのそみ侍りたれ
祥すゑともきゝくよみ侍りたる

冬ハ花なく雪打しる木々の梢に花咲るあすれこそ
鳥羽乃落にらしといふ人哥よも此弟と出のこえん
へうまてあるときさうちふ海のりの名ふたちあり
てよめりける　山家初雪
冬そとは人さそ知ある跡も松尾折ちに詠つき雪そつもる
龍泉寺ふ年ひさしく住し渇食の坊主まゐり
しにあつまりくいとたくよしく人あてつしつきゐりし
うちうきこゝろ和歌にうとふきて六義にかなひを
あきらめんへりとりくて苦労しけてそのにはにあ
よめりける人しすあるきハ　遠山雪

志かし雪よ清くまくこゝる岳や山よつもる雪ハ清く吹ぬれ
志やうあんしの浦孫太　山雪
冬くまハ光そまするる山姫の雪ハ清くえくぬすめとよみける
杉風しん　松雪
木曽山の松人にハやまもむかしりはやの雪と遊川継ける
かんてあんのえんかうえへく捨て庭の梅とうやまハけさ
降し雪とえふまゝ手に絡くまちしはあとすめしまて
あるし人へし　霞
筆の子ふよときし霞乃たちても消きそちりし跡あと

国立公文書館
National Archives of Japan

あるしあしきと刑部丞輔かむかしよみける歌

主あしき家にあつかりける財ハさこそたからに物を思ハん

ある人の家にかくる小夜みくるまて埋火かきおこして

ねそひありけるにあるしよめる釈神祇

るかくる道の辺の辻社はふきもむすはしの本の下

寄神楽とよみて侍りける

いさめ乃る庭火のかけに月もちて雲井にひゝく朝倉の声

ある家にて佛名

んかまの三世の佛をおかみてあかきていぬる雪のふる人

祇んといふ法師よめる古寺残月

鐘の音にのまりてきえし有明の月ハ嶺こえし西の山寺

歳暮といふ事を侍りける

いたつらに暮ゆく日しは年月ハ身の思ひの尽てまてあかねん

歳暮によめる述懐と

花のかくはうりぬるとしといひしよりはやむかしのこゝろそ残

恋

逐夜増恋

君とのみ思ひしハ夢も寝しうとも浦きいてあこかれねめん

待不来恋

待つとひとく妹かまてるを歌ハあしとも頼ミ乃あまなるこゝろ

かひなき恋といふ人をよそにありける
松山とも思ひそこなきを白濱の塩干に見えぬ貝の那
朽木によする恋
山ふかき谷の朽木のしらぬ人まつ身のさましくも世
川によする契恋
君か世へあかぬ契を我は見る川の流もあさくなりぬる
寄袖恋
現にも夢にもみえぬ我恋はたかひにぬるゝ袖
寄煙恋
人しれぬ思ひくゆる世なき胸のけふりとなりてもえあかるらん

あさけなき恋にもへんとよそ見ん
蝶乃羽乃うすきあさかをあまてこそ果は絶ぬる思ひん
涙によする恋
君とのみ枕もひとつにて寄る川の袖ぬれて我そ恋ひめる
糸によする恋
此恋は結ひかためてし身なれはかたくして身はあはまし
かよふ文を恋わたりて
君とのみ枕もひとつにて涙に袖ひたすなかめなり
かなしき恋を
夢にも君ならぬ我恋は君にあふのかよひそ

寄滝恋

見るまゝひに飛鳥の滝つくまきるをきえんと思ひかねとよて

あふことはかたきぬる文を

かよふつもるなれとも猶まて君をそ絶間ある風と思ひつゝまよ

文よりせて

お前をも見て我と思ひ人かか苦しき流るゝつま恋もするかな

ましてよそてうしはる恋と思ひけゆゑ

とまたゝの待まる橋の君まてけとよりゆかん人をつま流

枕によする恋

押当て娘そまさるかわか国乃小萱の枕にゆくは恋て

水によする恋

我恋は日毎に水にさも似たる思ひ河まさりて涙そ

嬬によする恋

嬬袖乃あ床常の床とそ君旅しなれは嫁そ思ふしきよ

月によする恋

松有る月や明まて月さへすむ橋を君は猶と明かし猪しん

堂によする恋

誓ひせて思ひこそ堂より橋もおちる我か胸のうち

経朽によする恋

老うして底うて住家をみん何いつか哀と君や存りいん

浪によする恋

清見かたもとちか乃浦波に消て身をなからへまん

恋しくも恋ともいはず年を

あきハいふに今ハ恋とも人にしられてあまりて君をまちわひん

待夜あはぬ思ひして月まちあかすを

いつまで君をまつとしてしくはまや横雲にもれあかしてまつまで

神に祈る恋を

あしきなの野坂の浦に恋をして君を言葉の神に祈らん

かなはぬ恋

御意ハ文も命もかけたるにかなはぬ恋の身となる

一夜契て恋を

君とのみ枕ならひ人の里にして一夜ちぎりてたつかなき

名残惜恋を

わか恋はひとつまなこを如月の枕の上にて落てなみたを

笛によする恋

君が袖中そよくる笛竹のふしハ秋もあかす

竹によする恋

よそにもとひとしらぬ呉竹の末葉の露と消ハ消なん

忍ぶ恋

わが恋ハさそり中川の流ハ思ひかねとくるよもすがらし

寄鳥恋

あら河のかたをしもやすらはと松乃戸に妹ハこしまて鳥の聲きく

時鳥によする恋

時鳥まつにねぬ夜はつらきをも妹をまつよとおもひなくさむ

花によする恋

花と見て思ひ忘すれ時あるをとまつれはまた思ひ出する

三月によする恋

鳴てしはつる雨かしきハ君かへいうる思を心にかくせは

柳によする恋

春風にみたれひそめし青柳のいとたえまくも文君を頼ぬ

嵐によする恋

さよふけぬ妹にこすしてひとり山のねのすさましくなかめひとりをり

風によする恋

山風にひかれ君か有香しらは吹くる思ひよそにつてやせん

五月雨によせて

はるゝまも乃朝の空にあらしなきてくもる文の夜すて

郭公によせて

五しの夜乃枕よ志のこそ時鳥聲をきゝてや侍ありける

河やなきによする恋

口の恋ハ五月雨かもに思ひそめあやめも知ず袖そぬれける

あひてわかるゝ恋

あひ見てもゆきゝの逢坂の関守ハわかれをしき君をとゝむる

旅によする恋

山路行柴人なれや我恋は君をなけきに持てかへるき

草紙によする恋

わすれひ絵の草紙のそこにみる君か姿をとめてもむなしく絵もあらぬ

ある人しつかにかよひける女乃もとへ文をつかハしけるまたかへりことせてひさしくなりにけれはよみてつかハしける

まつとせしほとは菖蒲にあらねとも君にかくて思ひ寝のなかれ

あるをんなをねきかこれにまつえさん為女のもと

あるをさなきひしおとこの在ることをききて

さりけれハあやしく思ひて文をやりけれと

かへりみて人の返事もせさりけれハよみてつかハしける

よみてつかハしける

秋風に吹やる君を松の戸をまつもせぬ人そかなしき

ときこゆきこと人ある女をたのひて

せうそこつかハしけるにある時女返しとしけり

浪水に志ありけりひたる草乃ふたる君ハ袖そぬれける

みしの京にやんことなき人のむすめにすみけるを

ましかこゝろひとつおもとにいのちかへしとの
かくとそきえしたつひとつゆゝのうらゝに
ありしよをあはれ人のきえてなをやしきさゆ
よるつきて見よ侍りけるに貫之つらゆきぬ
かへしなるはいとゆかしくてのちよまれども
ことなくて文やり侍る
久方の月の桂にみえまさる心ありける人の面そる地
女返し
久方の月の光はきよけれどもうらむものの身には墨そめ
清つるのさとの名をのみ袖にかけてなれぬれそ

とあすの種をおろしてたのみしも一はなる二たび
あやめを
五月雨に思ひそみれんあやめふきたるところにかへりつる
小田のますらを
時鳥まつよはたちはるもあるへくもまれにひとそまして
雲にのまする恋
おもひそ妹と侍るに雲隠れつる思ひに消る心そ
川にのまする恋
佐保山川あやすきるものにはさらにせきとめよ
野にのまする恋

野も山もへし祷ハ我ゆへまよひまゐる君ゆへならは
すさうのおもひまて何なる人のあつきをまつあまた付なりけり
てる日もよるもあかしにあかし恋の音ともなく
まか袖ハ数ならぬ袖しるし恋乃としてと
あふせもなくて恋を思ひんつくしなるあひそめ川のみなそこふかき
月によする恋
君ゆへの思ひはくるしき我かみやとあか月露ていて頃
我よりまことある文人をとかくかくしと
天の原雲井なるにすむ恋をかへさるこそかする我ハ鄙
恋のうひねしらぬ恋と寄によする

君か千世の道にはやくまかせてききもよふ秋の宮のゆる
又
久方の雲ゐよりの君か千世にゆるき編を上のひとなれり
雑
夜をこめてすみよしの江にすむ月
末すめる玉津嶋江に風まつの月ハ霞にかすむなる
春曙
除夜歌
春と立し去年の池水の汀乃花ハあけとこそちりぬ

能宣乃風といふ事をゑん法師によみ侍りける

須摩乃浦に吹風はまことにしのひて紀

せうこんしはちあんさうよむ人くあけまて

残雪とよみ侍りけるに

春の日も猶そおもひけむ岩のけむりさく雪のもとに消

又

消のこる雪のとこ山むしろ島あそふ事をつきてけるかな

枕かしら人の雪をまとひつくと

ゆふ日さして氷の上のあさ山川瀬よはなれて雪の色

岡残雪

長閑なる春の日かけの野辺の人よ摘まさる雪の日くれ

き残りけふ世をもとくとらくものなきを人乃

ちらんへたまりつゝおもひむ人かならんありなん猶ハまとめ

てふ花のまつりの草の残雪

春の野にすゝろ乃あまの花ちらくて又泡雪よあさる

又山の残雪と

春きても霞の中に出山野ハあらしに雪ぞのこれる

ここかなしつく米らしくらうくおもむ人乃

あ川まのうら鶯春雨

うちつけて春雨ならや花のため思しといそく雨のけしき

安房守みなよしのいゑちかつくひ給ひける人へくらへ
よみ侍りけるに夕霞をよめる
つれしくとなかめもあへる春の日は夕の霞は猶そまさりける
三位のつほね雑をよみもんへつかはしける
出家の思ひのつれ鳴きしに教へ行かんかも妻乞ひとする
松かし人へ雲雀
たよりなく雲雀鳴くなる春の野に霞こめたる山のはまで
いとひはぬ重雄おなしひとりとよみける
接まちや雲井にあかくひとりやとふ声も花の所より
雲雀を

打つれて雲雀たつなる張田川風みさえひとつ波ぞたつ
よしさね乃備前権守都をいてゝよめる
帰る雁須磨乃浦にもおりかへて旅の名残を思ひわすれめ
人にかはりてあつまへ帰る雁を
きぬきぬの別の涙たえまなく暁かへる雁の羽をとよそ
帰雁
雁かへる空くもなくて玉川さとこしに思ふ給ひにいつてむかん
せうとなりし備前帰雁霞まつねてゆくと
又年をよみそんへつかはしたる
行雲の羽袖をかさねて明ぼのにしのふの露をかへるらん

秋風に人帰一人をよみ侍りける

天乃原霞すみたりくる古庵鳥部紀もらさん

嶺帰人

人々る嶺のつ支文をめ白て又る行手もさや路濱まず

あるる嶺まで庵を

今のるの花をいすゝ主庵乃自ひと共す路をりそ思ふ

面中此つもし風るまろ志としお丈人二三人かよの

中よりて人もとみ面ちりまあ其ひあやりてらず

すりとをかみ華をまろきられるの旅人紀井あり

をのまをまるらくよりみ侍るの春田

引庵はくの吹る遠し主山縄乃世死りける小田乃苗代

又人

鳴こはるる春風あり田をすき初てきしてはあはれなん

秋風下おろ茂

猪の男の鳴き山田乃一返しちりり里人と住む渕の稲

えいのまゝ法師無憧と手とよみける

承るとほひ田へとまし人の日も香してつる人家乃か稲

武人の庭まゝ春風眺望とまありよみ侍

岸つゝ岩乃岩根とくる水末ハ荒お山春の川波

春述懐

世にあらそまたはまためくく人の世にたちまちなきはふしつくりなり
あらく人まゐ神楽禰宜とよめといひけるはかなりけく
千早振神代のためしにやまとくもつきせぬ法の帯なる
まゐ釈教とえいせしあめ人の縁起をやよめりける
草も木もなべて花のちる法の庭の嵐も成仏の砂

哀傷

或人の父乃三回忌にあたりて追善として　七日
僧尼をともなひてまうてあのりける
まゐしい歌もそへ忘れ草ましやみのちる谷にてつかはしける

餞別

さぬきへくだるときさいひける人に身をよりて
乃としめより伊予國へまかりける人に身を憂しける
やるとて和歌のひまいり日をもまちわびんきはすてふ
首途にはなみよみてつかはしける
思ひ出る白波の立ちをるみ行末の旅の思ひはおもひをともなし

親の許へ遣はし

もろともにくらむこころも白浪のたてる乃ちかし思ほ
そのうちに三河まできそうのあはれにてあめにて
人々のかくへ文れこせけるに返事して侍る
局あるかぎり雲居まではるかなりけんかぎりにてをしき

山科にこもりすむ人のもとへつかはしける　志
ものうさのむかしよりくみしかみゆかりのれためし
まつりおんといふまた袖ハ志のしむひと名残お
しらてちれむけるとしもんなきなり
よミとくりける

東路のゆくまきとき別れには又あふ頃の実もたのもし
西院のやどにすみける梁間のいへにまかりて人々
ひ終もおほそひとつのうたに禅みつつのれく
むつひるる僧によせさんほくしかき侍りてま
たはままいり奥へ侍るをみえんへるをはへりてそ

あやかきをとらへ人々ハ老をときまて三とせ
ときへはえくしも思ひたる僧にるをとつきう
みやこへうきあそくハつまれりもいまこちをしまれ
そも侍りのかのなきハ名残もなくおもひて
川　袖に袖をとりつくよみける
またのへ松をひたりて名残あをいつる藤乃かはあれど
こをときさてなちもとる袖とる又あきおくへく
いへまたる
いまもりおくの名残のまとたてすさひ　橘のまさる
名の一文字

這上下巻者櫻井中務亟基佐（法名永仙）詠歌也
藏深窓雖秘本令懇望書寫畢

右櫻井基佐集上下二巻雖不富于家以類本無之不能校正

群書類従巻第二百六十三

国立公文書館
National Archives of Japan